

津波で被災した畑に仙台白菜を定植

2020年の東京オリンピック開催が決まった2013年9月8日、宮城県岩沼市で仙台白菜の定植作業が行なわれました。白菜の品種のひとつ「オリンピア」は1964年の東京五輪を機に開発されたもの。タイミングの良い出来事に参加者から拍手が起きました。さらにこの日は駐仙台大韓民国総領事館の関係者も参加。キムチに向く品種として開発された「秋の祭典」もあわせて定植されました。

●塩害に強い仙台白菜、産地も収量も拡大

震災後、宮城県内の農業を元気付け、復興のシンボルとなるよう11年より取り組みを進めてきた食のみやぎ復興ネットワーク※の「仙台白菜プロジェクト」。定植作業当日はあいにくの雨でしたが、仙台市川平・桜ヶ丘地区の親子やみやぎ生協のメンバー（組合員）、明成高校や宮城農業高校の生徒たちなど総勢170人が集まり、白菜の苗を畑に植えていきました。

岩沼市寺島地区は阿武隈川と海に挟まれた土地。かつては仙台白菜の一大産地でしたが、津波で大きな被害を受けました。海側には津波でなぎ倒されてまばらになった防潮林が当時のまま残ります。

はりう ひさお

針生 久夫さん（JA全農みやぎ）が「ご覧

の通り、復興はなかなか進んでいません」と周囲の風景に目をやりながら、現状を語ってくれました。「実際、まだ野菜を作れる環境にはありません。でも農家の人は耕作していない土地を見ると辛いと思うし、そのままにしておけないと思うんです。そういう意味でも、塩害に強い仙台白菜をここで育てていこうと思うと、気持ちが明るくなります」。

仙台白菜の収穫量は、プロジェクト初年度にあたる一昨年が154トン、昨年が164トンと増えてきました。「今年は180トンを目指します」と今野一彦さん（みやぎ生協店舗商品部）。「組合員さんからも、宮城県を代表する野菜に育ててほしいと言われています」。

産地も岩沼市・名取市だけでなく、これまで農地の作付ができなかった亘理町、東松島市へと拡大。震災後初の栽培作物となる仙台白菜に期待が寄せられています。

供給の面では味の素（株）など多くのメーカーの協力が予定されています。定植作業に参加したエバラ食品工業（株）や三菱食品（株）は「お店に仙台白菜が並んでいるのを見ると、こんな風に皆さん一生懸命育てているのが分かっているだけに、何かご協力できたらと思います」と苗を手に畑に入って行きました。



畑の奥には、津波でまばらになった防潮林が当時のまま残る。



仙台白菜の定植作業の様子。

●仙台白菜のキムチで日韓の国際交流

収穫予定時期の11月には、日韓の国際交流イベント「仙台白菜キムチフェスティバル」が開催されます。

駐仙台大韓民国総領事館の李凡淵（イ・ボンヨン）総領事は、昨年2月の赴任以来、被災地復興のために何かできないかと考えていました。そんなとき領事館の職員を通じて知ったのが明成高校の仙台白菜の取り組みでした。「仙台白菜を使ったキムチづくりで復興支援ができる」と気付き、さっそく明成高校に連絡。「仙台白菜プロジェクト」のつながりを通じてJA全農等関係者と相談。「仙台白菜キムチフェスティバル」を企画しました。「おいしいキムチを作って被災した人たちの力になりたいと思ったのです。仙台白菜で作るキムチは韓国と日本を結ぶ心のインフラになります」。オリジナルのTシャツも作り、交流を盛り上げます。

この日は李総領事をはじめ、領事館の職員や家族など25人が定植作業に参加。李京子（リ・キョウコ）さんと崔雪子（サイ・ユキコ）さんが「仙台白菜は水分が多いので、水気をしっかり出すのがおいしいキムチを作るコツです」と教えてくれました。



当日、仙台白菜の定植作業に参加された李総領事（写真左）、李さん、崔さん。

●仙台白菜を中心に広がる明るい豊かさ

白菜の苗を育てたのは、宮城農業高校と明成高校の生徒たちです。苗床から一つひとつ丁寧に株を分け、参加者に渡していきます。自分の家でも白菜を栽培しているという遠藤華那さん（宮城農業高校）は「白菜を自分で漬けることもありますよ」とにっこり。手を泥だらけにしながら「地元の仙台白菜をもっともっと知ってもらいたい」と話してくれました。

参加した子どもたちも泥だらけです。裸足で泥の中を歩く子もいて、お母さんたちも苦笑い。ぬかるみに足をとられそうになりながらも約1時間で定植作業を終えました。

仙台白菜に関するプロジェクトは食の復興みやぎネットワークのほかにも、高校生たちの食育プロジェクトやJA全農みやぎの取り組みなど、さまざまな形で進

められています。明成高校の^{のぶたけ}高橋信壮先生は、それを「幾つものプロジェクトがつながり、仙台白菜を中心とする食文化ができています」と評します。

畑にいるのは農家の人、一般の市民、高校生、小学生、韓国の人々、世代も職業も国籍も多様です。「被災した畑に仙台白菜を植えようと思った人たちはです。白菜の種子も歴史をつないでいます」。その風景に「明るい豊かさ」を感じると高橋先生は笑顔を見せます。「震災以降、被災地はいろいろな課題を抱えたままですが、韓国領事館との出会いで国際的な広がりも生まれました。こうした形で絆を一層深めながら仙台白菜プロジェクトに取り組んでいきたいです」。

仙台白菜は塩害に強いという長所がある一方で栽培が難しい面もあります。針生さんは「この岩沼はかつて日本一の生産量を誇った白菜の産地だった」と言います。「その誇りを忘れず良い仙台



定植作業に参加した宮城農業高校の高橋さん（左）と遠藤さん。

白菜を育てていきたいですね。また仙台白菜は復興のシンボル。風化が進む中、仙台白菜を見ると震災を忘れてはいけないという気持ちになります」。

JA全農みやぎの^{ちひろ}官澤千浩さんは「仙台白菜プロジェクトは、震災後に農業団体や生協、メーカーなどいろいろな団体がつながってできました。こうした取り組みを進めることで宮城の農業の復興を果たしていきたいですね」と話していました。



定植作業に裸足で参加した小学生。

※みやぎ生協を中心とした 227 団体で活動（13 年 10 月 1 日現在）。

記事の一部あるいは全文転載を希望される方は、下記連絡先までご連絡お願いいたします。

連絡先：日本生協連 渉外広報本部 広報部 出版グループ 担当：八幡、新井（電話：03-5778-8183、
または、メールアドレス：action@coop-book.jp）までご連絡ください。